（令和６年８月28日掲載）

多様な性の一つとして

勝又 栄政（かつまた・てるまさ）

トランスジェンダー男性当事者。東北地方出身、高知県在住。教育系ITコンサルティング・就労移行支援における仕事を経て、現在は宮城教育大学非常勤講師・日本学術振興会特別研究員（立命館大学所属）として研究や講演活動を行う。

著書に『親子は生きづらい―“トランスジェンダー”をめぐる家族の物語』（金剛出版）。

私は、出生時には女性として戸籍登録をされましたが、現在は男性的（法律の関係でまだ性別変更できていない）な立場で社会生活を送っているトランスジェンダーの１人です。

昨年４月に高知県へと移住し、地域の方々にも自身の性自認や性的指向をオープンにして暮らしています。ただ、今でこそ自身の性のあり方について周囲に話せるようになりましたが、20年近くの間、私は自身の性を隠していました。

それはかつて「男性で生まれたなら“男性らしく”、女性で生まれたなら“女性らしく”、かつ異性愛者として生きること」が社会の「当たり前」とされていた中で、そこに当てはまらない私は社会に存在してはいけない人間のように感じていたからです。

家庭では、行事の度に化粧やきらびやかなスカートをはかされ、少しでも男の子のような振る舞いをすれば親からは「女らしくしなさい」と何度もしかられました。また、学校に行けば男女別の制服や持ち物、敬称（ちゃん・くん）、異性を好きになることが前提の恋バナ（恋愛の話）など、どこに行っても「性別の当たり前」があり、次第に私は社会に合わせ自分を押し殺すことを覚えていきました。

しかし、周囲の目におびえ、自身を偽った状態で生き続けることは、非常につらく悲しい時間でした。

現在では、ジェンダー格差の問題やLGBTQ+の存在が認知されるなど、社会の側の性にまつわる理解が進み、性は「男性」「女性」ときれいに２つに分けられるものではなく、性を構成するいくつかの要素（出生時の性・性自認・性同一性・性的指向・性表現など）から成り、一人一人それぞれに多様な性のあり方があるという認識が広まってきています。

国連をはじめ世界的に「SOGI（性的指向・性自認）」は人権課題として捉えられ、高知県内においても８つの地域でパートナーシップ制度が導入・支援の充実が目指されるなど、SOGIに関する取り組みが進められています。

私が住む地域でも、今年からパートナーシップ・ファミリーシップ宣誓制度が導入され、パートナーとともに安心して地域で暮らせることをとてもうれしく思っています。

幼少期の私を振り返って、「多様な性のあり方がある」ということが「当たり前」の環境であったなら、１人で悩む時間がもっと少なかったように思います。だからこそ、今後の未来には同じように悩む人が少しでも減り、お互いの性のあり方を尊重し、自分らしく安心して暮らせる社会が広がることを心から願っています。